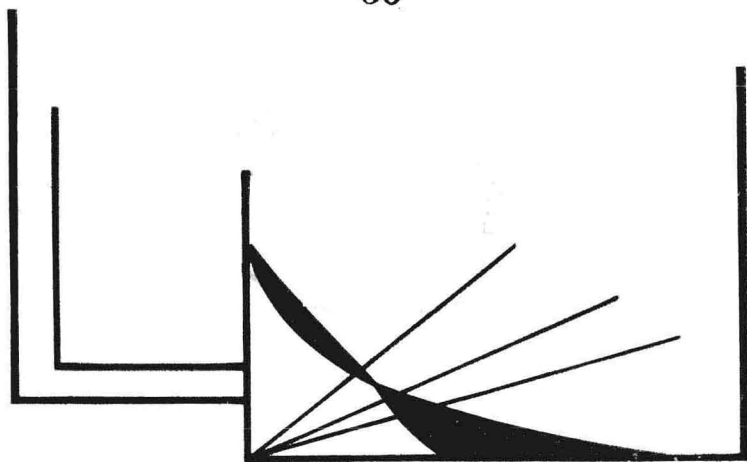


藏藏夫見
好健好吉
盛島野井
河中中白
集

新選 現代日本文學全集

36



筑 摩 書 房 版

河盛好蔵
中島健蔵
中野好夫
白井吉見集

昭和三十四年十二月二十日 発行

著者

河盛好蔵
中島健蔵
中野好夫
白井吉見

発行者

東京都千代田区神田小川町二ノ八
古田 晁

印刷者

東京都青梅市根ヶ布三八五
山田 一雄

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

〔電話〕東京二九局(29)七六五二(代表)
振替 東京一六五七六八
整版 株式会社 精興社
印刷 株式会社 精興社
製本 株式会社 精興社

河盛好蔵集 目次

フランス文壇史(抄)	七	伝記文学の貧困	五
パリ物語(抄)	三	母の思い出	九
左翼的人間	六	明るい風(抄)	一〇

中島健蔵集 目次

現代のヒューマニズム	一三	竹山道雄への公開状	一七
人間横光利一	一七	一人の平和主義者から福田恆存へ	一七
現文壇に与える	一七	二つの弁論	一七
文学の根本問題	一八	舞鶴事件	二〇
二つの公開状	二〇	中村翫右衛門氏のための弁論	二七

中野好夫集 目次

秋声の描く女	三五	近代文学の運命	三六
諷刺文学序説	三六	シェイクスピア管見	三六

臼井吉見集 目次

私小説の系譜……………	二二	常識的な、あまりに常識的な……………	二七
求める神 語らぬ神……………	二五	もはや「戦後」ではない……………	二八
浪漫主義……………	二六	傷はまだ癒えていない……………	二九
怒りの花束……………	二七	風前雨後(抄)……………	二九
私の信条……………	二四	ぼらのへそ(抄)……………	三〇
島崎藤村覚え書……………	三五	中野重治断片……………	三七
永井荷風のこと……………	三三	椎名麟三氏への手紙……………	六一
谷崎潤一郎ノオト……………	三六	「舞姫」論争……………	六四
志賀直哉―日記と小説……………	三八	人生相渉論争……………	六四
幸田露伴の死……………	三九	日本語と酒と……………	四〇
宮本百合子について……………	三九	伐木隊長手記……………	四〇
川端康成の文章……………	三九		

河盛好蔵の履歴……………井伏鱒二 四三
新しい人……………中野重治 四五
中野好夫氏について……………木下順二 四六

白井吉見を語る……………手塚富雄 四三
解説……………原田義人 四四

装幀 恩地孝四郎
恩地邦郎

河盛好藏集

文芸サロン

コンピエールニ離宮

文芸サロンの話をしよう。アルフォンス・ドーデーの『パリの三十年』のなかに「文芸サロン」と題する一章(これは一八七九年に露都聖ペテルスブルグの『新時代誌』のために執筆されたものである)があるが、そのなかで彼は次のように書いている。

「今日、文芸サロンと名のつくものは唯の一つも残っているとは思われない。その代り、人が言うように、もつと活動的な別のサロンがある。

それはエドモン・アダム夫人やドーソンヴィル夫人などの政治的なサロンである。純白か、でなければ真赤なそれらのサロンでは、知事を作つたり、大臣を攻撃したり、また時々まつ屋間に公爵たちやガンベッタが姿を見せたりする。

次に、人々の遊び楽しむ——ただ遊び楽しむことだけが目的であるとは言わないが——サロンがある。昔を思い、懐しむ連中で、夜食をした

り、遊びごとをしたりして、できるだけコンピエールニを思い出すのである。美しい温室、この脆い避難所の硝子の下では、専ら外面的な、また世俗的な生活のもつ匂いの全くない花が汚れを知らずに咲き乱れている。しかし真の文芸サロン、客をもてなすことの厚い、年輩のミューズのみわりに、文学者や、自称文学者たちが、一週に一度、短い詩を朗読するために集つて、少量の茶のなかに、小さな乾菓子を浸すようなサロン、このようなサロンは全く姿を消してしまつた。」

こんな風にし書き出してドーデーは、二十年前に彼が出入したアンスロ夫人のサロン、スタンダールやヴィニーやミニッセも出入したこの有名な文芸サロンについての思い出を語るのである。しかしこのドーデーの言葉にも拘らず、文芸サロンは二十世紀になつても盛んに開かれてゐる。それについてはまた別のときに話したいが、ここでは第二帝政時代から第三共和国時代にかけて、文学者の出入した有名なサロンについて語りたい。

栗本鋤雲の『晝窓追録』を見ると、巒山公子の言葉として「予屢々『ナポレオン』(三世)ニ接見スルニ容貌不揚言詞咄々口ヨリ出スニ不能ニ似たり。遊宴舞踏ノ際ト雖モ、唯左手鬚ヲ撚リ右手肋ヲ撫シ黙シテ盤旋シ、間マ或ハ手自ラ茶ヲ捧ケ人ニ呑マシムノミト、大智ハ愚ナルカ如シ、其レ此ノ謂ヒカ」という記事が出ている。ナポレオン三世はこんな風に風采の甚

だ揚らぬ皇帝だつたらしいが、皇后のウージェニーは非常な美人であつた。幕末にフランスに渡航した日本人のなかに皇后に拝謁した人がいる筈である。たしか渋沢栄一も会つていたように思う。

それはともかくこの皇帝は自ら相当の文学者であると思ひこんでいたし、皇后もまたフランスの名流夫人らしく文学と文学者が好きであつたから、チュイルリーの王宮を始め、コンピエールニやサンクトルイーやアリックツの離宮にしばしば文学者を招いてサロンを開いた。このサロン、というよりは宮廷であるが、そこに出入する文学者のなかで皇帝や皇后と最も親しかつたのはアロスベル・メリメであつた。ウージェニーは一八二六年にスベインのグラナダに生れ、五三年にナポレオン三世に嫁したのであるが、彼女がまだ生家のスベインの大貴族モンチホー伯爵家の三女であつた頃からメリメと知り合ひであつた。『カルメン』の作者が歴史記念物監督官であり、次の下院議員に任じられたのは皇后の推挙によることもちろんである。彼自身もまたナポレオン三世の忠実な廷臣であつた。したがつて普仏戦争における皇帝の敗北は彼には非常な打撃であり、そのショックのために死んだといつてもよいのである。

コンピエールニの書取り競争

話を元に戻すと、コンピエールニはパリの北方オーズ県にある町で、ルイ十五世の作つた

広い城館があり、ナポレオン一世がマリー・ルイズとの結婚式をあげたところである。美しい庭園や森で有名である。このコンピエーニュの離宮に文学者がしばしば招かれたのであるが、雨の日には、室内で人々は文学談にふけるのが習わしであった。そのようなある日のことである。その日集つていたのは、メリメ、オクターヴ・フーリエ、息子子のデュマの三人の文学者とオーストリア大使メッテルニヒ夫妻に皇帝と皇后を加えた七人であつたが、メリメはこれから書取りの競争を試みようと言ひ出して、鉛筆と紙をみんなに渡した。

「ひどく六つかしいのではないでしょうね、メリメさん」とウージェニーはたずねた。

「ごくやさしいものですよ。いまにお分りになります」。

そう答えてメリメはテキストを読み始めた。ここで私は読者諸兄にそのテキストを紹介しなければならぬのであるが、これは綴りの六つかしい単語ばかりを並べたもので、原文をあげなければ意味がないので省略することにしよう。日本語でいえば、「あはれ都にありし時は、法勝寺法成寺たど喜見城の春の花」とか、「一切有為の世のならひ、如夢幻泡影如露亦如雪、応作如是観の心を」というような耳で聞いただけではよく分らない文章を朗読したものだと思つて頂けばよろしい。

そのうちに皇后は閉口して鉛筆を置いてしまつた。

「いやですわメリメさん、あなたはあたしたちをからかつてらつしやるのね。その文章は頭も尻尾もないじゃありませんか。」

メリメは鼻眼鏡をかけ直して、抑えつけるようにして答えた。

「どうかしばらくお待ち下さい。最後までくればすつかり意味が分ります」。

皇帝は嬉しそうに笑ひながら言つた。

「ウージェニー、早く書きなさい。遅れますよ……ところでメリメ君、今のおしまいの文句をもう一度くり返してくれ給え」。

それからメリメはまたゆつくりと、教室における大学教授のように読み出した。そして時々間を置いては、犠牲者たちを眼鏡越しにじろりと一瞥する。皇帝は消してばかりいるし、皇后は書く手をやめて言葉を探している。そして時時苛立たしそうに足ぶみをする。メッテルニヒ公爵はどく吹く風とばかりに落ちつき払つて書いている。公爵夫人は横からのぞきこんで写している。フーリエとデュマは頭をよせ合つて、まるで小学生が勉強しているようである。やつと最後まで読み終ると、メリメは時計をとり出して言つた。

「二分間の猶予を与えます」。

彼はそれからみんなの紙を集め、机の前に坐り、皇后から拝領の金のシャープ鉛筆で、満座の不安そうな視線を浴びながら、それを訂正し始めた。「ひどい、まちがいがいだ！　ひどい、まちがいがいだ！」と彼はくり返しながら、そのくせ当人

もときどきテキストの方をちらりと盗み見している。やつと彼は立ち上つて、その結果を報告した。

「優勝はメッテルニヒ公爵です、まちがいは三つしかありません。次はオクターヴ・フーリエ君で十九のミス。次はアレクサンドル・デュマ君で二十四のミス」。

それを聞いてウージェニーは言つた。

「安心したわ。アカデミーの方々でもそんな感じです」。

メリメは更に続けた。

「メッテルニヒ公爵夫人は四十二のミス。皇帝陛下は四十五。皇后さまは六十二です……」

「あたしはいつもこうなんです」と皇后は少しばかりやしうに言つたが、それからオクターヴ・フーリエやデュマの苦がむしを嚙みつぶしたような顔を見て大声で笑ひ出した。「樅姫」の作者はメッテルニヒに向つて言つた。「公爵、いつ閣下はアカデミーに出席してわれわれに書き方を教えて頂けるでしょうか」。

これはオクターヴ・オーブリの「皇后ウージェニー」(一九三一)のなかに誌されたメリメの書取についての有名なエピソードである。コンピエーニュ離宮におけるナポレオン三世の接見の光景についてはゾラの「ウージェーヌ・ルゴン閣下」(一八七六)のなかに見事な描写がある。尤もこれはゾラが直接観察したものである。彼は宮廷に出入りできるほど当時は有名ではなかつたからだ。この場面、またはナポレ

オン三世や皇后についてのいろいろな材料を提
供したのはワローベールであるといわれる。

ウージェニー皇后は明るい、きわめて魅惑的
な女性であつたが、一面軽佻で、しばしば政治
に口ばしを入れ、ナポレオン三世の失政は彼女
の責任に帰すべき部分が少くない。一八七三年
に寡婦になり、一九二〇年まで生きていた。

マチルド女王

マチルド・ボナパルトは、ナポレオン一世の
末弟ジェロームの一人娘で、一八二〇年にイタ
リアのトリエストに生れた。ローマとフィレン
ツェで教育を受け、従兄のルイ・ナポレオン
(後のナポレオン三世)とは許嫁の仲であつた
が、ストラスブル事件というもののためにこの
縁談は破談になつた。彼女は一八四〇年にロ
シアの貴族アナトール・ドミッドフ公爵と結婚し
たが、夫は稀代のドン・ファンでその上粗暴な
性格で、彼女を非常に苦しめた。あるとき舞踏
会の最中に満座のなかで夫から頼に平手打ちを
食わされた機会に、露帝アレクサンドルに訴え
て離婚の許可をえた。ツァーの裁断によつてド
ミッドフは毎年二十万フランの年金を彼女に与え、
二度とパリには姿を見せないことを命じられた。

それは結婚して四年目のことであつた。
それ以後はマチルドはパリのクールセル街に
居を定めて、そのサロンを解放して、知名の文
学者や美術家を多く集めたのである。またル
イ・ナポレオンが一八四九年に大統領に選ばれ

てからは、エリゼ宮でホステスの役を勤めてい
たが、ナポレオンが皇帝となり、ウージェニー
を皇后に迎えてからは、マチルドのサロンは、
コンピエーニュと対立する一種の宮廷になつた
のであつた。

マチルド女王は非常な美人であつた。端正な
瓜核顔に、すばらしい金髪で、とくに眼が情熱
的で美しかった。その上、非常に教養があつて、
独創的で独立不羈な性格の持主であつた。「ゴ
ンクール日記」の一八六二年十二月十三日、土
曜日のごとくに、マチルド女王邸の晩餐会につ
いての次のような記述が見られる。

「吾々は二階の、緋色の絹を張つた羽目板に典
雅な棹に深く縁どられた姿見が幾面か飾つてあ
る、円い形をしたサロンに招じられた。ギャヴ
アルニ、シエスヴィエール、ニューウエルケル
クは既に座にあつた。やがて女王が見えられ、
進講者のド・フリー夫人が後に従つた。そこで
吾々は食卓についた。七名だけである。フラン
ス帝国の紋章のある銀盤を除けば、従僕、それ
も王家らしい正真正銘の従僕の重々しい様子と
無感動な態度とを除けば、到底殿下の御殿にい
るとは考えられぬほど、それほどこの愛すべき
邸内では精神と談話の自由が権威を振つていた。
このサロンは、現代女性の完全な典型を示す
のである。

此べうるものないほど優しい微笑——イタ
リア人の可愛い口もとに浮ぶあのねつとりとし

た微笑——と言える。その微笑のように愛らし
い女性、そして、分け隔てのない親しい言葉で
心置かない気持を起させる天真爛漫さ、惚々と
するような素直な子供のように、頭に閃いたこ
とは残らず言つてのける快活さ、このような魅
力をもつた女性。

今日は、女王は男子の間にいるという意識が
あり、そしてすつかり心をさらけ出し、女性の
甲を脱いではいしたが、しかも実にうつとりとさ
せるような愛嬌があつた。女王は、吾々がその
姿を描いたあの時代(十八)以来、不思議にも女
性の水準が低下したということに関して、美術
的なのや文学の新刊書に興味をよせているか、
または、雄々しくはなくとも、せめて高尚な、
或は稀な趣味をもつていような女性が少しも
見つからぬ退屈さに関して、まことに気の利い
た、きびきびした不平を言われた。それどころ
か、女性に面会し、応接しても、その大部分が
話を共にできるようなひとではなく、あつても
そんなひととは極めて少数であると女王は言われ、
「よござんすか、この部屋にいまある御婦人が
入つて見ると致しますね、すると恐らく私は
すぐ話題を変えなくてはなりませんでしよう。

もうじきお分りになりますわ……木当のことを
申し上げてるんでございますのよ、現代の賢い
女の方はどなた様にも私はいつでもお目にか
かる用意がございますの……ラシエル嬢、左様
でございますね、ラシエル嬢なら、私、立派に
お迎えいたしましたでしょうに……、サンド夫

人は、私、気が向いた時にお招き致しますわ』と言つた。』

右の文章のなかのラシエル嬢というのはスイス生れのフランスの有名な悲劇女優である。本名をエリザ・フェリックス（一八二〇—一五八）という。このときには彼女はすでに死んでいたわけである。サンド夫人はもちろんジュールジュ・サンドである。

マチルド女王は自分で絵をかき、自作の水彩画を好んで友人におくる趣味があつたが、絵の才能はあまりなく、エドモン・ド・ゴンクールはある日詩人のアンリ・ド・レニエにきかれて、「女王の絵かね、あの方はさつぱり進歩のあとが見えないよ」と答えている。彼女の絵はあとまで残っていないが、彼女の言葉として伝えられているものに次のようなものがある。「私は人の顔を見ると、その人を信用しなくなる。』

「人が誇張して言うのは嫌いではないが、腹に一物のある様子はいいやである。それではもう私はなにひとつ信じられなくなるから。』

「ある人が私には才能があると言つてくれた。しかしこの人は私のいないところでもそう言つてくれるだろうか。』

また彼女のサロンに出入する人々について、「あのひとたちのうちの何人が私が屋根裏部屋で生活するようになって私を訪ねてきてくれるほど私を愛してくれているだろうか」と言つた。しかしフローベール、ゴーチエ、エドモ

ン・ド・ゴンクールなどは、彼女を心から愛していた。とくにフローベールは彼女をひそかに恋していたほどで、それは今日残されているマチルド宛の彼の手紙を見ればよく分る。

マチルドは愛嬌のいい、心のやさしい女性であつたが、ナポレオン家の血は争われず、ときどき感情を爆発させることがあつた。レニエは岳父の高踏派の詩人ジョゼ・マリア・ド・エレディアからきいた話として次のような逸話を伝えている。ある晩エレディアが女王の家に出来る、丁度彼女が歴史家のテーヌと仲たがいをしたときであつた。それはテーヌがナポレオン大帝を『傭兵隊長』だと書いて彼女をひどく怒らしたからであつた。「もしボナパルトがいなかつたら、あたしはアヤッチョの波止場でオレンジを売つていなければならなかつたでしょう」と常に言つていた彼女のことであるから、伯父の悪口を言われるのが我慢ならなかつたのである。

そこで彼女はエレディアをつかまえてテーヌの悪口をさんざんに言つたが、あまり無茶なことを言うので、こんどはエレディアが気を悪くして、歴史家の権利や、テーヌの篤実な人格のこなどを述べて、大いにテーヌを弁護した。

すると彼女はこんどはエレディアに向つて腹を立て、「あなたはそんなにテーヌさんの肩を持つなら、この家を出て行つて下さい」と言い放つた。すると言下にエレディアは立ち上つて、挨拶をして帰つてしまつた。ところが翌朝の八

時に女王はエレディアの家を訪ねて、「エレディアさん、あたしはお詫びにやつてきました。あなたは立派な方です。あなたは友人を愛することを知つてられます」と言つたという。

彼女は一九〇四年に死んでいるが、生涯勝気な氣質を持ちつづけ、第三共和国になつてから露帝がパリを訪問して、ナポレオンの墓に詣でたとき、政府では彼女にも招待状を送つたが、女王は、「鍵は私がついています」という言葉を書きつけて、その招待状を送り返したという話がある。

女王はセーネ・オワーズ県のサン・グラチアンという村に別荘をもち、夏になると、そこへ友人たちを招いてサロンを開いた。イタリア風の建築の宏壯な別荘で、モンセラシの池まで拡がっている広大な芝生をもつていた。一階にはサロンと食堂と、テオフィール・ゴーチエが司書の役をつとめている書庫と、玉突場と、女王のアトリエと、それから広い廊下とがあり、二階には、あまり広くはないが、滞在客のための部屋が幾つもあつた。

フローベールの愛恋悲話

フローベールはよくこの別荘に女王を訪れたが、彼女のアルバムには、「女というものはいかに男が臆病であるかということを決して知らないだろう」という、謎のようなフローベールの言葉が書きつけられている。

フローベールがマチルド女王と知り合いにな

つたのは『サランボー』（一八六二）が刊行されてからであると言われるが、ある日彼がサン・グラーチアンの別荘で、女王と他人を交えずに水入らずで話したいと申し入れた。そして十一時になつて、他の招待客がそれぞれ自分の部屋に引きつた頃を見ずましてフローベールはこつそりとサロンに引き返してきた。そして疑い深そうな眼であたりを見まわし、女王だけしかいないことを見定めると、彼女のそばの椅子に腰を下した。しかし彼は何かしら考えこんだまま一言も発しない。そこで女王の方から口を切つた。

「いかがですか。なにかさし迫つた、うちうちのことであたしにお話があるようにおききたのですが。」

「あたしただけで、ほかに誰もいませんから、どうかお話しなすつて下さい。」

するとフローベールは不意に真赤になり、それから真蒼な顔をしてわけの分らぬことを口のみなかでぶつぶつ呟くと、すつと立ち上つて、どこかへ行つてしまつた。十分ばかり待つても帰つてこないの、女王はベルを鳴らして家令を呼んだ。

「フローベールさんはどうなすつたの。」

「あの方は控え部屋を通つて大急ぎで階段を走つて上られました。」

「そのままお戻りにはならないのかい。」

「ひどく興奮してられましたので、あとからついて行つたのですが、御自分の部屋にお入り

になりました。少しお飲みすぎになつたのにかいありません。」

「そうかい、と女王は両肩をあげて呟いた。では、あなたは明りを消してお休みなさい。」

以上は、『マラルド宛フローベールの未発表書簡集』（一九二七）の序文を書いたジョゼフ・ブリモリ伯の語るところであるが、この話はブリモリ伯が親しくフローベールから聞いた話であるといわれる。

フローベールはこの別荘で、『サランボー』のほか、『感情教育』（一八六九）や『聖アントワヌの誘惑』（一八七四）や『三つの物語』（一八七七）も女王のために朗読している。彼が一八八〇年に死んだとき、その翌日に女王は次のように書いている。

「秋が来るたびにサン・グラーチアンに来てくれたこの友人が亡くなつたことは、わたしの交友関係に大きな空虚を残したことに気がつく。今後は、彼のことを考えるときは、自分の思い出だけで満足しなければならぬ。気高い心をもつたこの優れた人、逆境にあつても屈せず、不運に出会つてもそれを易々と立派に堪え忍び、自分の妹の娘を娶つたこの忠実な友人とのゆるぎのない交わりを今後は諦めなければならぬのだ……」

サン・グラーチアンの別荘の常連にはフローベールのほかに、サント・ブーヴ、テヌス、ルナン、メリメ、シエヌヴィエール、ゴンクール兄

弟、ガヴァルニ、ニューウエルケルク、ラヴォワのような人たちがあつた。

女王はこれらの人たちに、いろいろの思い出を話すのが好きであつた。そのために彼女の口から有名な文学者についてのさまざまな逸話が語られている。

サント・ブーヴは女王の骨折で上院議員になれたのであるが、上院議員になつてからは、政府の方針に協力せず、ルナンのコレージュ・ド・フランスにおける講義が禁止されたときも彼は言論の自由を唱えて政府に桶つき、また御用新聞『モニトール』をやめて、『タン』に論文を発表したためにマラルドを怒らして、二人の友情は最後には破れてしまつた。しかし最初、サント・ブーヴの家を訪ねた女王が、帰るときにこの大批評家についての印象を、「宗教をもたない信仰家、あらゆる精神を理解するが常に若く、公平無私であるために必要なものには情熱をもたない稀な幸福に恵まれた人」と書いて渡したとき、彼はこの評言を非常に喜び、その結果二人の友情が結ばれたのであつた。

こんな風にマラルドは勝気で、わがままなために、そのサロンに出入する文学者との交友にも時に変化や動揺があつたが、要するに十九世紀の後半における最大の文芸サロンであつたということができる。当時のパリの有名な文学者たちは悉く彼女のサロンに集つたのであつた。マラルド女王のサロンのほかに、有名なものとしては、ドーデーのあげているアンスロ夫人

のサロン、ジュリエット・アダンのサロン、大出版者ギュスターヴ・シャルパンチエ夫人のサロンなどいろいろあり、これについても語るべきことは沢山あるが、最後に、フローベールのサロンについて話すことにしたい。

ムリヨ街の日曜日

フローベールは、一八六九年の八月に『感情教育』を書き上げると、それを印刷にまわしてからブルヴァール・デュ・タンブルの家からモンソー公園に近いムリヨ街四番地に引越越しをした。ごく小さいアパルトマンで建物の最上層にあつた。しかしこんどの家はマチルド女王の邸宅のあるクールセル街からは遠くなかつた。彼は旧宅から、近東旅行の記念品である革の安楽椅子や低い寝椅子を運びこんであつた。部屋のほかで一ばん主要な家具は建築家を使うような大きなテーブルで、その上には彼は二個のコップを置いてあつた。その一つには新しい鷺ベンを、他の一つには使い古した鷺ベんを入れ、その方のコップが一ぱいになると、彼は古い鷺ベンを削り直すのであつた。そのほかに父親からゆずられたというニューファウンドランドの漁船のマストの切れ端しの文鎮が置いてあつた。六階にある彼の部屋は明るくて、近くのモンソー公園の高い樹木が見下された。しかし天井は大へん低く、またバルコンから骨を折らずに樋のなかに唾を吐くことができた。

とにこの家で客を迎えたのである。玄關のベルが鳴ると、彼は書きかけの原稿の上に赤い絹の大きな布をかぶせて、自分の仕事道具を潔癖にかかし、日曜日には召使たちは大いゝ家になつかし、自分から立つて戸をあけにゆくのであつた。

客の数は多くなかつたが、いつも同じ顔ぶれで、その筆頭にトゥールゲーンフがいた。彼は巨漢のフローベールよりもさらに背が高かつたが、痛風に悩んでいて、いつも寝椅子の上に横になつていた。フローベールはこの友人を「モスコウヴ」と呼んで、非常に親しんでいて。この二人の小説家の間には、彼らの文学に対する相互の尊敬や、同じ広い教養や、お互いに好奇心の旺盛なことや、また下賤なもの、愚劣なものをも憎む同じ貴族的な感情などから、深く共通したものがあつた。その上、トゥールゲーンフは語学の天才だつたので、ある日曜日には、友人たちの前で、ゲートの諷刺詩を即席に翻訳してきかせたことなどがあつた。「私はこんなな会話の巧みな人間を知りません。彼は心のなかを打ち明けることのできる稀な友人の一人です」とフローベールはマチルド女王に書き送つている。「立派な、それでいて極めて謙虚な紳士」というのがフローベールのこの友人に対する批評であつた。

この気わずかしい先輩を楽な気持ちにさせる手段を彼は誰よりもよく心得ていた。フローベールのパリにやつてくるのが遅れると、「風車小屋便り」の作者は、いつも心のこもつた手紙を書き、「あなたがいないと、何事もうまくゆきません。みんなが顔を合わせ、大いに飲み、談論風発する機会がなくなりませう。物足りないことだらけです」などと書き送つたりしている。

エドモン・ド・ゴンクールも欠かさず顔を見せた。ゾラもよくやつてきたが、いつも長い階段を上つてくるので息を切らし、また忠実な弟子であるポール・アレキシスを必ずつれていた。彼はあまり喋らなかつたが、会話の合間をうかがつては自分の意見を出し、熱心にそれを主張した。そのほか出版者のシャルパンチエや、弟子のモーパッサンがつれてきたセアール、エニック、ユイスマンス、ミルボーのような若い人たちが、『ボヴァリー夫人』の訴訟事件のときに彼を弁護したセアールの女婿である東洋学者のフレデリック・ボードリー、またマチルド家の常連であるテニスやルナンやそのほかの文学者や美術家たち、ゴンクールの友人の美術批評家のフィリップ・ビュルチ、詩人のフランソワ・コペーなどが出入りする重なる人々であつた。

クロワッセ最後の会合

フローベールは、ブロンズの仏像の置いてあるマントル・ピースのそばに座を占めて、特別に作らせた白い陶器の短いパイプをくゆらせな

がら客の相手をしていた。このパイプを彼は時々友人に贈物にしたが、それは特別な敬意のしるしであつた。彼は栗色の大きな部屋着で身体をつつんでいた。客を迎えるために立ち上るときには、その両袖が翼のようにひるがえつた。

来客たちは、いつも手土産のような恰好で、読書の際に見つけた名文句を彼に報告する習慣であつたが、大い彼の方がよく知つていて、自分からそれをまちがわずに暗記してみせた。とくに気に入つた文句は、調子をつけていくども繰り返した。また彼の集めている「ゴシップ集」のために面白い材料を提供する客があつた。そんなときは彼は大いに悦んだが、しかしエドモン・ド・ゴンクールとはちがつて、その出所を確かめるまでは決してノートには書きこまなかつた。

一八八〇年三月二十八日の復活祭の日に、それはゾラたちの『メダグ夜話』が発売になる二週間前であるが、フローベールは、郷里のクロワッセの家に、ムリヨ街の常連のなかでも最も親しい友人を招いた。ドデーだけが欠席したが、ゾラ、ゴンクール、シャルパンチェ、モーパッサンたちは全部やつてきた。その日の楽しい会合の様子は『ゴンクール日記』のなかに詳しく誌されている。しかしフローベールがクロワッセに客を招いたのはこの日が最後であつた。これより先き、彼の愛した姪の夫コマンヴェールの事業の失敗のために一八七五年五月に彼は心ならずもムリヨ街の家を出なければならな

なつた。コマンヴェール夫人はフォーブール・サン・トノレ二四〇番地の彼女の家に彼を引きとりたといふと申し出た。「植木やアバルトマンや好きな骨董を見て、わたくしたちの心を鍛えましょう。それから離れていることはわたくしたちのもつている一ばんいいものを奪われることのような気がします」と彼女は書き送つた。

それに対してフローベールは次のような返事を出している。「親切な申し出まことに有りありがたいが、ぼくの心を鍛えよ、などと言われるとぼくは反抗したくなる……ぼくは自分の心に最も正当な養いをすら与えることなしに今まで過してきたのだ。ぼくの生活は労働と克己の連続であつた。しかし、ぼくにはもうこれ以上はつづかない。力がつき果てた感じだ……自分の家、ホームをまはやもてないと思うことはぼくには堪えがたい……」

同じ頃にクロワッセからジュールジュ・サンドに送つた手紙には次のような言葉が見える。「楽しみを先にした報いですが、老年の影は陽気な調子のもではありません。それでも冷水療法をしてから幾分ともなまくらが抜けました。今夜から後ろをふり返らないで仕事に専心しましょう。ムリヨ街の仮寓を出てもつと広いところへ移りました。ラ・レーヌ・オルタンヌ通りに姪が構えた新居の隣りです。この冬は独りぼつちではありません。もう孤独には耐えられないのです。」(一八七五年五月十日)このとき彼は五十四歳であつた。

この新居で、なお五年間、フローベールはパリに滞在するたびに、相変わらずムリヨ街の常連を迎えた。しかし一八八〇年五月に、彼がパリの友人に会うために旅の用意を整え、友人たちもそれを心待ちにしていたとき、突如として彼の死が伝えられたのであつた。ゾラの『実験小説論』『メダグ夜話』の出た年であり、わが国では荷風や白鳥の生れた翌年であつた。

アカデミー・フランセーズ

「不滅の人」たるを希う

わが国の作家で、芸術院の会員になることを終生の念願にしているような人はまさかあるまい。しかしフランスの文学者で、アカデミー・フランセーズへ入つて、いわゆる「不滅の人」になることを願っていない人は絶無であると言つても過言ではない。したがつて私の文壇史でも、ぜひとも一度はアカデミー・フランセーズの問題にふれなければならぬ。

新刊の研究社版『世界文学辞典』を見ると、アカデミー・フランセーズについて次のような説明が出てゐる。「フランス学士院を構成してゐるアカデミーの一つ。一六二九年頃からシャプラン、ゴドー、デマレ等の文学者、文学愛好者が会合してゐたのを、時の宰相リシュリューはこれを公的機関とすることを思い立ち、一六三五年その創立を見た。その後ルイ十四世の時ル

ール宮中に会合する許可を得た。大革命の時に解散させられたが、一八〇八年学士院の一部、国語国文学部として現在の建物に再興、王政復古と共にアカデミーの名称を回復した。その主要任務は国語調整の爲の辞典、文法、作詩法、修辭法の編纂であつたが、このうち辞典だけが一六九四年にできてその第一版を世に送つた。これはその後も継続され、一七一八、四〇、六二、九八、一八三五、七一、一九二九、三二一五年に夫々新版が出てゐる。文法書は一九三二年に至つて始めて『アカデミー・フランセーズの文法』が出た。この他アカデミーは毎年多くの文学賞を与へてゐるが現在行われてゐるものに、文学大賞、小説賞、ゴベール大賞、モンチヨン賞がある。会員は四十名。文学者のみならず一般の傑れた人物も会員中に選ばれてゐてこの会員は『不朽のひとびと』と呼ばれ、フランス人はこの会員になることを無上の名譽と心得てゐる。その功罪については多くの批判、非難もあるが、国語の擁護、文学者の地位と文学の尊嚴の維持等の功績は認められなければならない。

右の記述には少しばかり誤りがある。アカデミーの辞典は現在まで第八版（一九三五）まで刊行されているが、第七版は一八七八年に刊行されたので七一年ではなく、また一九二九年には新版は出てゐない。それからモンチヨン賞といふのはド・モンチヨン男爵（一七三三—一八一二）の遺言によつて寄託された財産を基金と

して、毎年フランス人のうち美德のほまれの高い貧困者に授与される有名な「美德賞」のことである。

ところでこの四十名の会員であるが、彼らら占めてゐる椅子の番号はちやんときまつていて、その一人が死ぬと、会員の選挙によつて選ばれた新会員は、その同じ椅子を襲うことになつてゐる。したがつて四十の椅子にはそれぞれ創立以來その椅子を占めた人の名が記録されてゐるわけである。例えば第二十二番の椅子はサン・タマン（一六三四）アベ・カサーニニ（一六六一）ド・クレシー（一六七九）ド・メーム（一七二〇）アラリ（一七二三）アベ・ガイヤール（一七七一）コント・ド・セギニール（一七八〇）ヴェイエネ（一八三〇）コント・ド・ソングイル（一八六九）リニドヴィック・アレヴィ（一八八四）ウージェリス・ブリエー（一九〇九）フランソワ・モリヤック（一九三三）といふことになつてゐる。年号は彼らがアカデミーへ入つた年である。

いかにしてアカデミシアンになるか

これを見ておどろくことは、この十二人の会員のなかで、文学者として人に知られてゐるのはサン・タマン、アレヴィ、ブリエー、モリヤックの四人にすぎないことである。これはほかの椅子でも大体同じで、アカデミー・フランセーズの椅子は、昔から文学者よりも、それ以

外の政治家、外交官、貴族、僧侶、軍人などによつて占められていたことが分らう。そしてデカルト、パスカル、モリエール、ラ・ロシュフコー、ルソー、ディドロ、ボームルシェ、スタンダール、バルザック、ボードレル、フロベール、ゾラ、ヴェルレーヌといつたフランス文学史を飾る大作家たちはいずれもアカデミーの会員ではなかつたのである。

このような事實は、われわれ外国人にアカデミーに対して白い眼を向けさせる理由になるのであるが、当のフランスでは決してそうではなく、バルザックでもゾラでも、またヴェルレーヌでさえ、アカデミーには決して無関心ではなかつたのである。なぜなら、彼らも一度はアカデミーの候補者たらんとしたことがそのことを証明してゐるからである。

周知の如くアカデミー・フランセーズの会員は、立候補した文学者（だけには限らないが）から選ばれることになつてゐる。その手続きについては、久しくアカデミーの終身書記をつとめていた文学史家のルネ・ドミックの書いた『いかにしてアカデミシアンになるか』（『アカデミー・フランセーズの三世紀』収載）という文章に詳しい。それによれば、会員の一人が物故すると、死後一カ月目に、アカデミーに空席ができたことが公告される。新たにアカデミシアンにならうとする野心をもつ人は（これは単に文学者に限らない。外交官でも聖職者でも軍人でも候補に立つことができる。アカデミー・